英語での発信力をサポートするリモート英会話システムの研究事業

本研究事業は、リモートによる英会話レッスンを通し、受講者の英語での発信力向上をサポートすることが目的である。レッスンのインストラクターには、多様な非言語情報を組み込んだアバターを用いた。また、受講者の自己調整や内省を促すための英会話評価システムの運用を試行した。

現在、多くの教育機関では、インターネットを活用した遠隔授業やコンテンツの配信が行われ、新たな教育・学習形態として注目されているが、対面での受講に比べ、緊張感や臨場感に欠ける傾向があることや、相手の視覚的手掛かりが少ないことなどがその弱点として挙げられている（赤倉・柏原, 2016, p. 87）。「視覚的手掛かり」に関し、本事業ではRichmond & McCroskey（2003）を参考に、教員と学生の非言語的関係性の中で重要とされている、①physical appearance、②gesture and movement、③eye behavior、⑤vocal behavior、⑥space、⑧environment、⑩time、をアバターの非言語情報として取り入れた。調査の結果、①は、受講者のモチベーションとレッスンの継続維持に役立ったと感じている。また、アバターの背景を変えることにより、「時間」と「場所」の多様性をある程度受講者に提示することができ、遠隔授業における可能性を一部試行的に実践することができた。更に、英語でのコミュニケーションに不安を持つ受講者であっても、アバターを使用しての匿名的な英会話レッスンには、比較的容易に参加し継続してくれる傾向が見て取れた。レッスン後に使用するJACET8000を参照とした発話評価システムは、学習者の思考プロセスを外化することに繋がり、学習者の“self-regulation”や省察“reflection”等に繋げる今後の遠隔英会話システムの運用について一つの方向性を得ることができた。

本事業の成果はJASEC　第29回年次大会（2020年10月17日；リモート開催）にて報告した。また『日本英語コミュニケーション学会紀要　第29巻第1号』に投稿し掲載された。

＜参考文献＞

赤倉貴子・柏原昭博（編）（2016）. 日本教育工学会（監修）教育工学選書Ⅱ 1　eラーニング/eテスティング（p. 87）ミネルヴァ書房

大学英語教育基本語改訂特別委員会. （2016）. 大学英語教育学会基本語リスト新JACET8000　桐原書店

Richmond, V.P. & McCroskey, J. A. （2003）. Nonverbal behavior in interpersonal relations, Boston, MA: Allyn & Bacon.

地域連携センター　兼任研究員　香取　真理

浅虫のWA

本プロジェクトは、青森公立大生と浅虫住民が共同で企画・実施するイベントを通じて「和」のコミュニティを築き、「WA」（Wonderful Asamushi）の魅力を再発見し、一般市民をはじめ国内外の人々へ発信することにより、浅虫の「輪」を広げることを目的としている。

2020年10月17日（土）、ゆ～さ浅虫4階会議室とサンセットビーチあさむし駐車場で文化祭を開催した。全国的に新型コロナへの感染リスクが高まる時期に、学生団体が学外イベントを企画・準備するには様々な制約があったが、予定通り7つのサークル（音響、国際交流、ダンス、ねぶた囃子、アカペラ、演劇、吹奏楽団）と運営スタッフを含めて学生127名、住民および来客者41名が参加した。コロナ感染の三密を敬遠することもあって一般参加者は少なかったものの、恒例の浅虫ねぶた祭と花火大会が中止され、まち全体が重苦しく落ち込んでいただけに“大勢の若者たちが懸命に披露する様子をみて元気をもらった”、“来年もぜひ来てほしい”との賛辞を頂いた。

開催にあたり、浅虫の諸団体から多大なお力添えを頂いた。まちづくり協議会と町会は芋煮会を開き住民参加を呼びかけ、観光協会と温泉旅館組合は参加学生に入浴券及び施設を提供し浅虫を再訪する機会作りに協力して下さった。また、大勢の住民から用具の貸与、学生用お弁当の差し入れ、関係者紹介および協力要請など心温まるご支援を賜り、今後の活動への絆が結ばれたことは大きな収穫である。来年度はより多くの住民団体が参画し、来客者数を増やすイベントに発展させ、浅虫の地域力を強化する年中行事として引き継がれる礎を築きたい。

地域連携センター
兼任研究員　丁　圏鎮